

【実践報告】

タブレットを活用した国語科「ことわざ」の単元の授業実践

山口 真優希（長崎大学大学院教育学研究科）

藤井 佑介（長崎大学大学院教育学研究科）

1. 背景と目的

現在、教育現場において ICT (Information and Communication Technology: 情報通信技術) 機器の授業等での活用が進んでいる。その背景には、社会の急速な変化に伴う ICT 機器の開発や AI 等の普及が挙げられる。ICT の普及に伴い、文部科学省文部科学省が平成 26 年に委託した「校内研修リーダー養成のための研修手引き」によると、校内研修のリーダーとして期待する教員に対して育てたい力が「校内マネジメント力」「授業力」に加え「ICT 活用力」「ICT 授業設計力」^[1]を含む 4 つの力が求められている。しかし、ICT 機器を活用した授業を行うには、まず ICT 機器の活用方法を知ることが必要である。さらに、ICT 機器はあくまでもツールであることから、その特性を理解し、授業のどの場面で活用することが適切かを判断する力が教師には求められる。そのように考えた際、授業で ICT 機器を活用して授業を構成することは容易ではないことがわかる。したがって、多くの教師が実践の参考とすることができるように、ICT 機器を活用した実践の記録は事例として蓄積されていく必要があるだろう。

そこで本稿では、第 4 学年国語科「ことわざ」の単元におけるタブレット端末を中心とした ICT 機器の実践について成果と課題を報告する。

2. 方法

2.1 対象学級について

本実践における対象学級は、長崎県の A 小学校第 4 学年で、男子 15 名女子 15 名計 30 名の学級である。ICT 機器の活用頻度が低い児童が多い学級である。この学級の児童たちは問いに対して、思考し、考えをノートに書くことができ、さらに、その考えをしっかりと自分の意見として発表することができるという特徴を有している。また、他の児童の発言から自分の考えを深めることができる様子も見られる学級である。話し合いの場面において、個々の児童が積極的に参加する姿が見られ、グループで一つの目的に向かって話し合うことができる児童が多いことも特徴の 1 つとして挙げられる。

2.2 タブレット端末の活用

本実践では主にタブレット端末を活用した。タブレット端末を活用した理由として、以下の 3 点が挙げられる。

まず、動画であれば、事前の準備が十分にできるという点である。「ことわざを劇で学習する」という方法も考えられたが、それでは限られたスペースで教室内から想定されることしかできず表現の幅が広がらないことが想定される。タブレット端末を活用した動画であれば、教室だけではなくグラウンドや図

書室など学校全体を活用してあらゆる場面を想定しながら動画を撮ることができる。これは、これからの学校生活で起こる事象にことわざで言い表す児童が増えることに繋がると考えた。

次に、再現性が高い点である。劇であれば、失敗をしてしまった際にやり直すことができず内容が伝わらないことが考えられる。そうすると、学習したが結局日常生活に落とすことができず、ことわざがこれから子どもたちの口からでてくることが期待できないと考える。しかし、タブレットを用いて動画を活用すれば、事前に撮ったものを授業の時間に発表することができる。また、失敗をした際でも自分たちで納得がいくまで何度もやり直すことができるために、発表会の際には、満足のいくものを紹介することができる。

最後に自分たちを客観的に見ることができる点である。動画にして発表することができるので、自分たちの作成した動画を客観的にみることができる。全員が見ることができることによって改めて「この場面ではこのことわざを使うことができる。」という認識をもつことができ、これから学校生活を送る上で起きる事象をことわざで言い換える児童が増えるのではないかと考えた。

2,3 授業実践の概要

今回、国語科の「ことわざ」の単元を行った。単元は、4時間構成で作成し、第1時間目を平成30年9月7日に行い、第2時間目を平成30年9月10日に行い、第3時間目を平成30年9月11日に行い、第4時間目を平成30年9月12日に行った。以下に、計4時間の授業の流れを1時間ずつ分けて記述していく。

第1時間目

1. ことわざについて興味関心をもつ。
2. ことわざとはどのようなものか国語辞典を活用して調べる。
3. 実際に日常生活でことわざを活用しているのか考える。
4. 使っていないことからことわざは必要なものなのか議論する。
5. 日常生活でことわざを活用している場面を動画にして子どもたちに見せる。(猿も木から落ちる)



(図1) 猿も木から落ちる

サッカーが得意な子がサッカーをしている。そこへお友達が現れて褒めていると、失敗してしまう様子。

1
時
間
目

6. 大めあてを立てる。
7. 動画を作成するにあたってルールを提示する。
 - ① 授業者が決めたことわざの中から選び動画を作成する。
 - ・馬の耳に念仏
 - ・仏の顔も3度まで
 - ・石橋を叩いて渡る
 - ・情けは人の為ならず

- ・七転び八起
- ・縁の下の力持ち
- ② 学校の場면을イメージして作成すること。
- ③ タブレットは班(6人)で1台を使いまわすこと。
- ④ 全員が動画に移ること。

8. 6つのことわざの意味を授業者が持ってきた資料または、国語辞典で調べ、ノートにまとめる。

第2時間目

- 2 9. 前時の振り返りを行う。
 時 10. ルールの再確認を行う。
 間 11. 前時に調べたことわざの意味の確認を行う。
 目 12. グループ(3人)でどのような動画を撮るか考える。
 13. 台本まで書いて動画を撮る前に実際に劇を行い練習する。

第3時間目

- 3 14. タブレットの使用方法的説明を受ける。
 時 15. 実際に動画を撮りたい場所へ行き練習を行う。
 間 16. 準備ができたグループから動画を撮る。
 目 17. 班で二つのグループができるために、動画を撮る際はもう一つのグループの子が動画を撮る。

第4時間目

18. 授業者が発表の手本を見せ、発表の仕方を説明する。
 19. 作成した動画の紹介の流れを提示し、練習させる。
 20. 発表を行う前に、ワークシートを配布する。(メモ欄を設け自由に考えを記述することができるようにする)
 21. 練習が済んだら、モニターの前に子どもたちを集めて発表を行う一番初めは授業者(柵からぼたもち)が発表を行う。そのあとはランダムに発表を行う。
 4 (順番は、授業者が画面に出した順番に行う)



(図2)発表を行っている様子。
 自分の席ではなく自由に見える
 ところに移動してもよいと指示

22. 全員の発表が終わったら、ワークシートに感想を記述する。
 23. ワークシートに書いた感想を3人が発表する。
 24. 最後に、この単元の通してのまとめを授業者が行う。

3. 結果

本章では実践の結果として、子どもたちが実際に作成したことわざの動画を紹介していく。ことわざの動画は、10グループが各1つずつ作成し計10個の動画が完成している。以下に示すものは、実際に子どもたちが作成した動画の写真とその場面である。

Aグループ

- ・ことわざ：馬の耳に念仏
- ・内容：授業中に友達が発表しているのに全く聞いていない様子を表したシーンを再現している。



(図3) Aグループの作成した動画の一部分

Bグループ

- ・ことわざ：仏の顔も三度まで
- ・内容：サッカーをして帰る途中にお坊さんに出会い、遊び半分でお坊さんに充てると1度目は叱られず2度目も叱られず3度目にすごい顔で叱られる様子を表したシーンを再現している。



(図5) Bグループの作成した動画の一部分

Cグループ

- ・ことわざ：馬の耳に念仏
- ・内容：体育の授業中に先生に「止め」といわれども聞く耳を持たずに動き続ける。そして、近くの友達にも言われても動きを止めずに聞こうとしない様子を表したシーンを再現している。



(図4) Cグループが作成した動画の一部分

Dグループ

- ・ことわざ：仏の顔も三度まで
- ・内容：ある休み時間に、わざと友達にボールをぶつけていたら、1度目、2度目は笑って許してくれたが、3度目で怒り出し、追いかけられる様子を表したシーンを再現している。



(図6) Dグループが作成した動画の一部分

E グループ

- ・ことわざ：縁の下の力持ち
- ・内容：ある休み時間、休み時間になったとたんにみんな運動場に飛び出し遊びだす中、クラスで育てている植物に水やりを毎日してくれる友達をみて感心した様子を表したシーンを再現している。



(図7) Eグループが作成した動画の一部分

F グループ

- ・ことわざ：石橋を叩いて渡る
- ・内容：運動場にあるアスレチックの急な坂を元気に駆け下りる二人に対し、なかなか降りることができず、慎重に坂を下る様子を表したシーンを再現している。



(図9) Fグループが作成した動画の一部分

G グループ

- ・ことわざ：情けは人のためならず
- ・内容：いつも忘れ物をしている子に毎回教科書を見せてあげている子が珍しく教科書を忘れてしまい、いつも忘れている子に見せてもらえる様子を表したシーンを再現している。



(図8) Gグループが作成した動画の一部分

H グループ

- ・ことわざ：七転び八起
- ・内容：キャッチボールの練習を行っている際に、なかなか思うようにボールをキャッチすることができないでいたが、練習を続けるとだんだんキャッチできるようになる様子を表したシーンを再現している。



(図10) Hグループが作成した動画の一部分

Iグループ

- ・ことわざ：七転び八起
- ・内容：逆上がりができずにずっと一人で練習している友達が逆上がりをできるようになった様子を表しているシーンを再現している。



(図 11) Iグループの作成した動画の一部分

Jグループ

- ・ことわざ：七転び八起
- ・内容：鉄棒の練習を行っているがなかなかできない。しかし、友達にやり方を教えてもらい練習を続けるとできるようになる様子を表したシーンを再現している。



(図 12) Jグループの作成した動画の一部分

以上が A グループから J グループまでの動画とその内容である (図 3,4,5,6,7,8,9,10,11,12)。全く同じ資料から意味を調べて動画を作成させているにも関わらず、同じことわざでもグループによって全く違う角度から動画を作成していた。例えば「七転び八起き」では3つのグループが動画作成にチャレンジしてくれたが、それぞれに動画の内容が異なるものであった。しかし、間違っているものがあるかと言えばそうではない。むしろ、全てが正しい。このような点からわかるように学校生活の中には、たくさんことわざを活用できる場面があるということが分かった。

4. 考察

ここでは、上記実践の結果に関して児童が書いたワークシートからその成果と課題について考察を行う。単元を通じた感想で、3つのパターンの感想が子どもたちから出てきた。どの子どもの感想も前向きなもので、授業に対して意欲的であったと判断できる。

(1)他のグループの評価

図 13 は、他のグループの良い評価が記述されていたワークシートである。前半では、「いろんなグループの動画を見て、おもしろかったし、グループ全部がちゃんとことわざの意味とぴったりでよかったです」と記述していることから、自分とは違うグループの評価を行うとともに、ことわざの意味も合致しているのかを判断していることがわかる。また、後半では「生活の中でも実際に使ってことわざの学習をいかしていきたいです。」と記述されていた。これは、この単元を通して、学校生活でことわざを活用する機会が多くあることに気づき、これから日常生活でも使って行こうということわざに対する意欲が表現されていると判断できる。

いろいろなグループの動画を観ておもしろかったし、グループ全部がちゃんとことわざの意味とピッチャリでよかったです。同じことわざの動画でもそれぞれ場面がちがって生活のいろいろな場面があったので、生活の中でも実生活に使う、ことわざの学習を生かしていきたいです。

図 13 他のグループへの評価に関する記述

いろいろ動画を見て、ほくは全部ピッチャリ動画だった。生活の中でもことわざを使おうと思った。次は、ほかのことわざの動画を作ってみたい。そして、その動画もピッチャリで分かりやすい動画を作りたい。

図 14 生活での活用意欲に関する記述

(2) ことわざに関する活用意欲

図 14 は、初めに、発表会の感想を記述していた。そして、「生活の中でもことわざを使おうと思った。」というようにこの単位を通して、動画を作成し、学校生活でことわざを使う場面がたくさんあるということに気づき、日常生活で活用しようとする意志も見られた。そして、次に今回作成した動画を他のことわざでもう一度作成してみたいとさらに深くことわざを学習したいという意思がみられる。

どの動画もピッチャリだったけど、一番よかったのは、そらくん、さきさん、ゆうしくんのグループとよしたかくん、あかりさん、たくまさんのグループがよかったと思います。そして、もう一度ことわざピッチャリ動画を作ってみたい。ことわざをおぼえてみたい。

図 15 学習意欲に関する記述

私は最初やる気がなくて、みたくなかったけど、動画を撮るのも楽しかった。みてみたら、とてもおもしろかった。ので、良かった。そして、やる時にもグループで協力して、動画をさつえいできて、楽しかったし、良かった。

図 16 タブレット端末に関する肯定的意見

(3) ことわざに関する学習意欲

図 15 では、初めに発表会の感想を「どの動画もぴったりだった」と記述していた。そして、どのような所がよかったのかまで具体的に記述されていた。最後には、ことわざの動画を作成して、「もう一度ことわざぴったり動画を作ってみたい」「ことわざをおぼえたい」と記述されていた。このことから本実践を通して、ことわざ自体を多く学びたいという学習意欲が喚起されたことが推察される。

(4) タブレット端末に関する肯定的な意見

図 16 では、記述した子どもの心境の変化等が記述されていた。最初はやる気が欠けていたがグループで協力して何かを成し遂げることを通して、達成感や楽しさを感じることができたと記述されていた。最初はやる気が起きなかったと記述されていたが、最後にはよかったと記述されているので、授業に対しての意欲なのか、動画を作成したことに対しての意欲なのかわからないが、前向きな記述であると感じられる。また、そのような経験を通してタブレット端末を活用する楽しさを実感していることがわかる。

5. 総合的考察

本実践では、単元を通しての感想を授業の最後に 20 分程度時間をとり、しっかり記述させた。子どもたちの記述からは以下の 2 点の示唆が得られた。

まず、1 つ目は、学習内容に対する意欲の喚起ができたことである。ほとんどの児童が本実践を肯定的に捉えており、ことわざに対して学びを深めたいという記述をしていた。自分たちで動画を作成し、それを発表会として全体共有することで、自分たち以外のことわざにも触れることができ、よりことわざを知りたいという意欲が出たのではないかと考えられる。

2 つ目は、タブレット端末の活用に関する意欲の喚起である。「動画を撮影できて楽しかった」という記述からもわかるように、学習内容だけでなくタブレット端末を活用する行為自体にも意欲的であったことがうかがえる。また、何度も撮り直して、自分たちの納得のいくような動画を作成する過程や、さらなることわざの動画を作りたいという記述からは、タブレット端末の利点が生かされていると判断できる。

以上のことから、本実践は子ども達の学習意欲を喚起したと考えることができる。ICT の活用に関しては教師が活用する実践が多く見られるが、本実践のように子ども達自身が活用し、その意義や良さを体感することには大きな意義があることがわかった。

一方で以下のような課題も挙げられる。

タブレットを活用した際に、子どもたちが意欲を授業に向けるためにもっと工夫が必要であったという点である。今回はテーマとして子どもたちの学習意欲が単元を通して継続的に続かせるための授業を行った。タブレットを活用して、授業を行ったが、タブレット活用の方の意欲が授業に対しての学習意欲を上回ってしまったように感じた。それは、ワークシートからもわかるように、「もう一度動画をとりたいたい」というような感想が多かったところからも判断できる。子どもたちが日常生活でことわざを活用することを目的に授業を行ったが「日常生活でことわざを活用していきたい」と答えた子どもが少な

かった点から、やはりタブレットを活用するときはデメリットも考慮しなくてはならない。

6. 参考文献

- [1] 平成 26 年度文部科学省委託事業「ICT を活用した教育の推進に資する実証事業」教員の ICT 活用指導力向上方法の開発 校内研修リーダー養成のための研修手引き

